

初中級日本語会話クラスにおける ミニスピーチ／プレゼンテーション・プロジェクトの実践について

高屋敷 真人

要旨

本稿は関西外国語大学留学生別科の日本語会話クラス（レベル 3：初級後期／レベル 4 中級前期）で実施されたミニ・スピーチ及びパワーポイントによるプレゼンテーションについての実践報告である。この試みは、教室における教師主導の疑似場面での会話練習を離れ、学習者が聞き手でもある同じ日本語学習者を意識し、双方のインターアクションを図りながら、学習者主導で初級段階からまとまった話ができるようになる活動を取り入れられないかという観点から始められた。スピーチとプレゼンテーションをコースにおける文型の習得を主とした日本語会話学習成果の総括的な発表の場とし、初級レベルの段階からでも、より複雑な談話形成のための基礎を身につけていける場を提供して行けるように指導法を工夫した。また、IT 機器を使用した将来の研究／ビジネスという公の場でのより高度な会話能力の育成への橋渡しの学習活動となることも目的の一つである。

【キーワード】 スピーチ、パワーポイント、プレゼンテーション、学習者オートノミー、学習者主導型授業

1. はじめに：背景と理論、及び先行研究

本稿は、関西外国語大学留学生別科において 2013 年秋学期（9 月～12 月）に筆者が担当した、初級後期会話クラス（日本語会話 3: Spoken Japanese 3、以下、SPJ3）及び 2014 年度春学期（2 月～5 月）より担当している中級前期会話クラス（日本語会話 4: Spoken Japanese 4、以下 SPJ4）で行われたミニ・スピーチとパワーポイント

によるプレゼンテーションについての実践報告である。SPJ3では、教科書『げんきII』を使用、敬語などを含む17課から最終レッスンの23課までをカバーし初級を終了する。SPJ4は、初中級～中級前期レベルであり、日本語能力試験N2レベルの合格を目指すコースの前半のコースとして設定されている。教科書はN2レベルの語彙と文型を念頭に本学で筆者を含むプロジェクト・チームによって、2010年より開発、試用を重ねているテキストを使用している。

筆者が担当する日本語コースにおいては、「モジュール型教材」（岡崎他1990:67-182）、「学習者主体」「自律的学習」（トムソン木下2009:17-25）、「接触場面」（ネウストブニー1995:186-206）などの教育理念を念頭に、実際に学習者が遭遇するような実践的な場面にこだわり、学習者によりコミュニケーション的な学びの場を提供することを目指している。例えば、学習者が学びたいと思うことを自ら選択し自発的に学べるような学習法を取り入れ、「学習者主体」の「自律的」な教室活動を促すような授業を心掛けている。しかし、そのような授業の実現のため、日々流動変化する学習者のニーズに不断に応え教材を常に改訂し続けていくことに困難を感じている教師も多いのではないかと思われる。本稿では、異なる背景や動機を持ち、大変な速度で多様化、変容していく個々の学習者のニーズをコースシラバスに反映させる教室活動の一つの方法として、自分の好きな話題を自由に選択し、教師の手を離れたところでの原稿やスライドの作成過程における学習者オートノミーの育成が期待できるミニ・スピーチとパワーポイントによるプレゼンテーションを取り入れた会話授業の実践について報告できればと考えている。

Nunanは、近年、教室活動を離れた教室外での言語学習（out-of-class learning）における学習者オートノミーの重要性を説き、教師の役割は、インストラクター（指導者）というよりファシリテーター（促進者）で、学習者が自らのニーズと興味関心に基づき自ら表現したいことを促進していくべきだと提唱している。（Nunan 2015:xi-xvi）これらのNunanの学習者のオートノミーの実現については、学習者がスピーチやプレゼンテーションを行う過程で自らのテーマについて発表原稿や準備することで行えるのではないかと考えた。学生が自分の好きなテーマを選び、準備段階では教師の教室内の指導を離れたところで原稿を吟味し作成する。また、その際、教室外の日本人学生やホームステイの家族に質問するなど教師以外の日

本語母語話者との協働作業も必然的に多くなると思われる。Nunan は、また、教室外言語学習の一つの手段としてテクノロジーとインターネットの積極的な活用（Nunan 2015:xiii）についても言及しているが、本プロジェクトの実践でも、これを取り入れ、発表用パワーポイントを作成する際、インターネットの情報を利用するように促した。

言語の学習活動として学習者にスピーチをさせる意義、目的とは何であろうか。スピーチの定義を「話し手が一人で多数の人前で、まとまった話をする事」であるとすると、独話と違いスピーチにおいては、話し手は一人でも、その準備段階や実際のスピーチ場面では、聞き手の興味や理解を必然的に意識していくことになる。つまり、聞き手の存在を常に意識しつつ「一定のまとまりのある話ができる」ようになるための効果的な活動になると言えるだろう。（国際交流基金 2007:39）山田は、「日本語プレゼンテーション」の授業においては、「プレゼンターと聞き手の双方が日本語学習者である」のであるから、「聞き手でもある日本語学習者に日本語を使用してわかりやすく伝えることが重要である」と述べている。そのためには「聞き手のことを意識しながら、日本語学習の話し方や説明の仕方、内容構成、発表原稿作成、スライド作成などのプレゼンテーションスキルをより丁寧に指導する必要がある」と指摘している。（山田 2012:171）このような「口頭表現能力というのは、聞き手が存在し、インターアクションが生まれてこそ確実に身につくものである」（黒崎 編 2012:3）という基本概念を念頭に入れ、スピーチやプレゼンテーションをうまくコース内に取り入れられれば、教師が主導する教室内の疑似的な場面設定による人為的な会話練習に対して、実際に日本語をコミュニケーションのツールとして使用し、自らの興味関心のあることを教師以外の母語話者とのインターアクションの中で調べ発表原稿を作成し、実際の発表でクラスメート（聞き手）に伝えるという学習者主導の言語学習がある程度実現できるのではないか。シンガポールの初等教育でのスピーチとプレゼンテーションの実践報告例では、その「最大の意義は日本語をコミュニケーションの『道具』として使うことである」とし、「ただ試験の成績のためにシラバス、カリキュラム、教科書の文法項目を覚えるという学習行為を越え、学習した日本語を使って、実際に他人に自分のこと、考え、アイデアを伝えることの喜び、達成感こそが、言語学習の最も大きい原動力となる」と述べられている。（タン 2010:7）

また、学習者がプレゼンテーション作成と発表の活動を行う際、Swain のアウトプット仮説の研究、あるいは、第二言語習得に関する実証研究ではインプット、インターアクション、アウトプットが密接に関わり、学習者主導でインターアクションを行うほうが教師主導型で行うよりもアウトプットの機会を多くするという報告もある。(稲葉 2011:1) この取り組みでは、教師の役割は発表進行の補助で、他のことは学習者(受講生)に任せて進めており、学習者主導型の授業の展開している。「学習者が自ら日本語(第二言語)のアウトプットを促進することに取り組んだ活動」の例として興味深い報告となっている。(稲葉 2011:8) 筆者もこの取り組みを参考に、従来の会話コースにミニ・スピーチとパワーポイントによるプレゼンテーションを組み込ませることで、上記の学習者のアウトプット活動の促進、教師がファシリテーター役という学習者主導の言語学習の実現、学習者間のインターアクションの場の拡大等が期待できるのではないかと考えた。

現在、スピーチ、あるいは、プレゼンテーションについての先行研究、実践報告例、教材などはそれ程多くないといえるが、その中でのほぼ全ての研究者、教師が現在日本語を学んでいる学習者が将来 IT 機器等を使用し、高等研究あるいはビジネスの場で発表を行うことを見据えた上で、その橋渡しとしてスピーチやプレゼンテーションを日本語学習の早い時期で取り入れることの効用、重要性を示唆している。

黒崎他は日本語学習者が「公の場でまとまった内容のことを話したり議論したりする」という経験を十分に積んでいないことに着目し、「専門分野での勉学・研究に役立つ口語表現」を効果的に身につけていくためのスピーチ、ディスカッションを柱にした教室活動を中級用のテキストとしてまとめ発行している。(黒崎 編 2012:3)

山田は、日本国内の大学での日本語教育では実践事例が少ないことを指摘し、「日本語プレゼンテーション」の授業、パワーポイントを用いた研究調査の発表の実践例について報告している。日本国内では、「留学生を対象にした日本語プレゼンテーション科目に関する実践報告、日本語プレゼンテーションの教師用指導テキスト、日本語学習のための教科書等は多くあるわけではない」とし、「日本語を使用してプレゼンテーションができるまでの学習プロセスをわかりやすく紹介した留学生用テキストも少ない」と指摘している。参考モデルになるようなプレゼン

テーション事例研究もあまりなされていないという国内日本語教育の現状を踏まえ、「大学のゼミ発表・研究発表ではパソコンを使用した視聴覚教材を提示しながらの口頭発表を要請されることもあり、そうした発表スキルを大学生としての早い段階で専門教育への橋渡し学習として実践的に行うことも必要ではないか」と述べている。(山田 2012:169-170)

深堀他は、これまでの日本語教育では、口頭コミュニケーション力養成に力を入れてきてはいるものの、日常会話を扱う「会話」に対して、公的な場での話を扱う口頭発表能力(スピーチ、プレゼンテーション)などが、特に、「日本社会で働く外国人の高度化・専門化が高まる昨今のニーズに適合したものなのかについて、検証があまり行われてこなかった」ことに着目し、「現在刊行されている日本語教科書の口頭発表に関する内容が、日本語学習者の実際のニーズに沿った内容なのかどうか、日本語のレベルや対象学習者、扱われているジャンルや取り上げられ方に注目し」、現行教材の詳細な調査を行った。(深澤他 2011:29-32) その結果、スピーチ、プレゼンテーションを扱った教材は、やはり中上級(特に日本語能力試験 N2 レベル以上)に集中し、「留学生 アカデミックな場面でのプレゼンテーション、ビジネスパーソン向け 契約や交渉の場面」での練習、活動例が多いことを指摘し、多様な場面でのスピーチなどの扱いは少ないと述べている。また、現在の日本語教育では「口頭発表」「スピーチ」「プレゼンテーション」種々の用語が様々な意味で用いられていると指摘し、(深澤他 2011:36) 「パブリックスピーキング」という新たなジャンルの定立、更なるニーズ調査、その枠組みの設定、指導内容の刷新について研究を進めている。(深澤他 2011:29-32)

今回のミニ・スピーチとパワーポイントによるプレゼンテーションの取り組みは、SPJ4(中級前期)の日本語会話コースのみならず、SPJ3(初級後期)のコースでも取り入れてみたが、筆者も初級レベルの学習者でのそれぞれのレベルに見合った文型や語彙の導入方法を工夫すれば十分にコミュニケーション能力向上のための学習効果が期待できると感じた。三浦他は、「プレゼンテーション能力とは、発表すべきよい内容を持ち、それを効率よく他者に伝える力」だとした上で、「初級レベルの日本語力では内容が希薄で一般論しか述べられないと思われがち」だが、「シラバスの中身と指導法次第で初級レベルでも内容のある発表ができることを実証」してきたとし、日本語でアカデミックプレゼンテーションを行うための入門

書を発刊している。中級以上がメインであるが、初級レベルの学習者でも Show&Tell を超え、プレゼンテーションの「発表の内容を充実させ、IT 機器を使用して、その内容を効果的に発表できるようになること」を目指した工夫がなされている。（三浦他 2006:2-4）

また、国際交流基金関西国際センターで開発された教材では、「初級段階からまとまった話ができるようになる練習を取り入れられないか」、「初級でも知的な話題を扱えないか」、「聞き手を意識した発表指導ができないか」という問いから教材作成が開始され、「まとまりとしての情報の列挙」から段階的に「より複雑な談話形成のための基礎となる表現パターンの習得」（因果関係、変化の説明、対比、分析など）を導入する工夫、同じ日本語学習者である聞き手を意識し、「スピーチの中でクイズを出すとおもしろい」などの工夫、「資料の見せ方／コンセプトマップの使用、「スピーチ作成のプロセスを重視した学習活動」の実現などを提言しており、「他者（ピアや教師）との協働の体験」の促進などを目指した教材作りの実践例となっている。その結果として、学習者の「日本語使用に対する自信、言語能力の向上、話題に関する知識の獲得」が期待できるのではないかと述べられている。（国際交流基金関西国際センター2014）

2. コース／シラバスデザイン

関西外国語大学留学生別科の日本語コースは、9月開始の秋学期と2月開始の春学期にそれぞれ15週間、開設され、学生は、1学期のみの短期コースか2学期の通年コースで学んでいる。コースは、週5コマ（月曜から金曜まで毎日午前中1コマ50分）の会話コースと週3コマの読み書きクラスに分かれており、担任制で運営されている。

筆者は、2013年秋学期（9月～12月）には、初級後期会話クラス（SPJ3）、2014年度春学期（2月～5月）からは中級前期会話クラス（SPJ4）を担当しているが、担当してきたすべてのコースで、中間試験前にミニ・スピーチ（学生の持ち時間5分間）を行い、期末試験前にパワーポイントによるプレゼンテーション（学生の持ち時間約10分）を行ってきた。成績評価での「発表」の内訳を10%と決め、ミニ・スピーチは3%、パワーポイントによるプレゼンテーションを7%としている。日本語会話コースでは7週目に中間試験を行い16週目に期末試験を行うことになって

いるので、それぞれの試験前にそれまで学習してきた文型と単語をできるだけ自分の発表原稿に組み込むように指導し、それぞれ、それまでの会話学習の成果を総決算的に発表する場になるようにコース設定を行った。

3. ミニ・スピーチ

3.1 ミニ・スピーチの説明とガイダンス、及び、テーマ選びの動機づけ

学習者は常に自分の興味、関心のあること、自分の考えや伝えたいことを日本語で自由に語りたいと願っていると思われるが、日々の会話授業では、課ごとに新しい文型、単語を学び、教師が主導するそれぞれの文型を使用するにふさわしいコンテキストでの場面練習（会話練習）をこなしていくことで精一杯であることが多いのではないだろうか。また、教師が設定した会話練習を離れ、実際にフリートークの時間を設け、学習者に自由に話すように指示したとしても何をどう話していいかわからず戸惑うことが多くみられるのではないだろうか。この傾向は初級レベルであればあるほど顕著であるように思われる。この問題を解決するために、ある程度、新しい文型学習を終えたあとで、テーマを決め、学習者自身が興味のあるものを選び、学んできたものを総括的に使用し話す機会としてミニ・スピーチをコースに設定してはどうかと考えた。ここでは、SPJ4 で行われたミニ・スピーチを例とし、具体的に実践例を報告したい。現在、SPJ4 では、中間試験前に6週間をかけ、会話テキスト全7課のうち、3課を終了し、学生は以下のような文型を学んでいる。

「～だけじゃなくて～も、～。」 「～そうだ/～そう{に・も}ない」 「～なら～たらどうですか」 「～め (大きめ)」 「～方 (大きい方/よく食べる方)」 「～ようになる」 「～{くらい (ぐらい) ・ほど}～。」 「～てたまらない」 「～っばい」 「～{なんか・なんて}～。」 「Noun ばかり」

会話クラスのサイズは12名から14名であるので、ミニ・スピーチ（発表持ち時間5分）の日程は3日間設定し、50分の授業時間内で3名から4名の学生が発表できるようにしている。これは、聞き手の学生にもそれぞれのスピーチを相互評価してもらうことにしているので、評価／コメントシートに書き込ませる時間を含め

である程度余裕をとって時間設定を行うようにしているからである。

ミニ・スピーチの約 2 週間前に 50 分授業を一日分使用し、ミニ・スピーチの説明と準備の仕方を指導している。指導内容は以下のとおりである。

タスク (Task) : 留学生の視点 (point of view) から、日本で見たもの、日本で経験したこと、これから日本でやってみたいことなどについてクラスでミニスピーチをしてください。

1. トピック : トピックは何でもいいですが、おもしろくて、クラスメートの役に立つ (useful) トピックがいいと思います。次のトピックから一つ選んで、レポートしてください。

- ① 日本で一番 (おもしろかった / 楽しかった / がんばった etc) こと
- ② 日本で、これから、やってみたいこと
- ③ 「これ、何だ？」 : 日本で見つけたおもしろいものについて

2. 時間 : 1 人 5 分 です。

3. 注意 :

- ① ポスターや実物 (real object) を持って来て使ってもいいです。
- ② ミニスピーチなので、パワーポイントは使えません。
- ③ Lesson3 までに習ったレベル 4 の文法をできるだけ使ってスピーチをしてください。
- ④ スピーチは、できるだけ何も見ないで、やってください。

上記の指導案の留意点として、まず初級レベルを終えた留学生によっては、初めて人前で日本語でまとまったことを話す機会であることが多いので、学生の心理的負担も考え、ミニ・スピーチを行わせることにした。持ち時間 5 分とあるが、実際のスピーチは 3 分とし聞き手の学生との質疑応答の時間 2 分を含めて 5 分と決めた。テーマは、何でも自分が好きなものというところと收拾がつかなくなるので、自分が日本在住の海外レポーターという設定にし、「日本」という括りの中で自分の日本体験報告、日本で見つけた面白いものの報告などの情報提供型のスピーチをさせることにし、ある程度話の内容に一貫性を持たせるようにした。学生には実物や写真、ポスターの使用を認めたが、3 分間の短いスピーチであるので、動画やパ

ワーポイントの使用は認めないことを説明した。パワーポイントによるプレゼンテーションは学期末の期末試験前に行うことも知らせ、今回はその小手調べ的なものだという趣旨を付け加えた。また実物や写真を見せながら、**Show&Tell** のように行ってもいいと告げた。**Show&Tell** に関しては、その意義について、「この活動の最大の意義は、初級の段階で既習の文法、文型を使って、人前で発表することによって、学習者が達成感や日本語を話す自信を得、それがさらなる学習意欲の向上や主体性につながることである。また、この活動を通して、クラスメートや教師との理解を深め、よりよい関係を築いていくことも期待できる。」(タン 2010:3) という意見もあり、初中級レベルであっても、接続詞や副詞などによる更なる高度な前後の発話間のつながりに配慮した談話レベルのコミュニケーション習得に向けた橋渡しの学習活動として十分に効果的なものになると思われた。

また、スピーチである限りどんなに短いものでも作文の朗読ではないので、「訂正した作文をそのまま読み上げるのではなく、聞く人に話しかけるように書き加えたり、書き直したりする箇所が必要であることを指摘する」、「わかりやすいユーモアのあるスピーチを考えること」(タン 2010:3)、「原稿を読むのではなく原稿を話す」、「意味のまとまり(チャンク)を意識する」、「原稿を読まない、ときどき見るだけにする、聞き手の顔を見て、話す」(三浦他 2006:219-221)などの先行事例の実践報告をもとに、学生には「できるだけ何も見ないですること(小さいメモを確認することはよい)」を強調した。評価は次のように行くと告げ、

成績 Grading (3% of the final grade)

You will be graded in the following three categories.

- a. Content
- b. Speech (including speech manner and memorization)
- c. Use of the structures you have learned this semester. Grammatical accuracy

既習の文型をうまく使用しているか、出来るだけ何も見ないで聞き手に話しかけるようにスピーチできているかを評価のポイントにすることを伝えた。

更にスピーチにある程度の結束性を保つために、下記のようにスピーチの始まりと終わり方についてのみフォーマットを渡し、内容自体は自由に練習するよう

に伝えた。

下のフォーマットを使って、スピーチを作ってください。

みなさん、こんにちは／おはようございます！

_____から参りました、レポーターの [your name] と申します。

今日は、これから [your topic] について、レポートしたいと思います。

私がこのテーマを選んだ理由 (reason) は、_____ [reason] _____からです。

or

_____ [reason] _____ので、私はこのテーマについて話そうと思ったんです。

では、はじめましょう！

[your speech]

では、何か、質問があったら、どうぞ。

質問がなければ／では、これで、私のレポートを終わります！

今日は、私のスピーチを聞いてくださって、ありがとうございました。

以上のことを説明した後で自分のスピーチのテーマについての動機づけの時間を設け、ミニ・スピーチのトピックについてのガイダンスを行っている。その際、下記のような教材シートを渡し、クラスメートと協働でディスカッションをさせている。

ミニ・スピーチのトピックについて考えましょう！

トピック： _____

Section: _____ **Name:** _____

1. クラスメイトとディスカッションしてください。

- ① 日本で一番おもしろかった こと／もの は 何ですか？
- ② 日本で買ったものは何ですか？ 集めているものは何ですか？
- ③ 日本で一番好きなこと、好きなものは何ですか？
- ④ 日本で興味があることは何ですか？
- ⑤ 日本でしてみたいことは何ですか。行ってみたいところはどこですか。

★ 上の中で トピックになりそうなものを選びましょう！

2. どうしてこのトピックを選びましたか？

このトピックを選んだ理由 (reasons)／目的 (objectives)：

3. このスピーチのおもしろい点 (point) は、どこですか？

50 分の授業内でディスカッションを終え、最終的に自分のテーマを決める期間を数日与え、上のシートを教師に提出させるように指導している。

3.2 ミニ・スピーチの実践例

以上のようにうまくガイダンスとテーマの動機づけを行うと学生はそれぞれ教師が思ってもみなかった様々な視座から日本について語ってくれ、バラエティに富んだスピーチが揃う。2014 年秋学期のあるクラスのスピーチ例を見ていくことにしよう。

Section B: 11 : 00 ~	Section A: 12 : 00 ~
1. サラさん 「進撃の巨人」	1. マリアさん 「USJ に行ったこと」
2. リンさん 「すばらしい日光」	2. アレナさん 「日本とロシアのキャラクター・グッズ」
3. ベリンダさん 「スタジオ・ジブリ」	3. プライアンさん 「伏見稲荷大社」
4. ミッチさん 「盆踊り」	4. ギスリさん 「スパワールド」

ミニ・スピーチ当日は、上のプログラムに見られるような多岐に渡るテーマでそれぞれの日本体験が語られ、興味をそそられた。大阪のテーマパークであるユニバーサルスタジオジャパン（USJ）についてのレポートはハロウィーンイベントについてであり、クラスメートの興味を引いていた。また、「進撃の巨人」やスタジオ・ジブリのアニメなどについては昨今のクールジャパンプームに影響されてか、多くの質問が交わされていた。その他、日本のご当地ゆるキャラとロシアのキャラクターを比べたもの、伏見稲荷大社の赤鳥居を頂上まで登った体験、大阪通天閣近くにある大型スーパー銭湯「スパワールド」の体験レポートなど、どれもクラスメートの興味関心、知的好奇心を刺激するものであった。

3.3 評価

学習者のミニ・スピーチの評価では、スピーチを録画し教師が行ったものを成績に反映させているが、それとは別に、聞き手であるクラスメートにも評価／コメントシートを渡し、それに書き込んでもらうことでスピーカーの話をしっかり聞くように導く、学習者同士のインターアクションの機会を増やすために学習者同士で質

問をしあう、コメントをしあう、評価しあうといった工夫を施している。以下は、評価／コメントシートの一例である。

スピーチへのコメント				
スピーカー :	_____			
タイトル :	_____			
Content : おもしろさ／わかりやすさ				
1	2	3	4	5

Fluency/Pronunciations : 上手さ				
1	2	3	4	5

コメント :	_____			

筆者は、教師が出したミニ・スピーチの総合評価を素点で学習者に Blackboard で知らせるとともに、希望者には個別対応で、クラスメートからのコメントを見せる、録画した画像を渡すなどして、学習者の自己評価の一助となるように留意している。学習者には、この時点で期末試験前に今度はパワーポイントを使用するプレゼンテーション（成績の 7%）があることを再度知らせ、今回のミニ・スピーチでうまく行かなかったこと、できなかったことを踏まえて、自己評価した項目を改善し学習を続けていくように伝え、学習動機をできるだけ継続させるようにしている。

また、これに加え、学習者同士の評価の素点の平均点を出し、クラスでの最優秀スピーカーを選び、スピーチ終了後のクラスで表彰するようにしている。学習者には事前にクラス内でスピーチ・コンテストをする旨、伝えておき、よりよいスピーチへの動機づけとなるように工夫をしている。

4. パワーポイントによるプレゼンテーション

4.1 準備とガイダンス、動機づけの実際

次に SPJ 4 コースにおけるパワーポイントによるプレゼンテーションの実践例を

もとに、指導法の立て方、工夫などについて報告して行きたい。ミニ・スピーチ終了後は、学生は中間試験週間に入り、口頭試験、筆記試験を受けることになっている。そのあと、SPJ4では、全7課のうち4課から6課までを終了した時点で4日間の日程で、プレゼンテーションを行っている。プレゼンテーションは、一人あたりの持ち時間を質疑応答も含め10分と決め、提示用コンピューターの設定や準備に時間がかかることを鑑み、それにも充分対応できるようにプログラムを組んだ。

ミニ・スピーチと同様に事前に説明ガイダンスを行い、テーマの選定の動機づけの時間を設けているが、ミニ・スピーチより少々早めに設定し、プレゼンテーションの2週間以上前になるようにガイダンスを行っている。この時点で学生が習得している文法項目は下記の通りである。

「～せいで、～」 「～てくる」 「～ていく」 「～{たら・ば}、～のに。」 「～ことになる」 「～おかげで、～」 「どんなに～ても、～」 「～ところだ」 「～ように{言う・^{つた}伝える}」 「～としたら、～」 「(たとえ) ～としても、～」 「^{めいれいけい}命令形 (Imperatives)」 「～ほど～ない」 「～しかない」 「～ようにする」 「～ものだ」 「～うちに、～」 「～ば～ほど、～」 「～まま、～」 「～くせに、～」 「～からと言って、～わけではない」 「N {くらい・ぐらい}」 「～だけで、～」 「～だけ{じゃ・では}、～ない」 「～わけ(が)ない」

ミニ・スピーチ同様、プレゼンテーションでもコースの既習文法や語彙をできるだけ使用することを伝える。学生には下記の注意事項を渡している。

【時間】 発表1人6分 (+質問時間4分)

【評価の仕方 Evaluation】

- a. 表現と単語 (Variety of expressions/vocabulary) 一ならった表現や単語をよく使っているかどうか
- b. 内容 (Content)
- c. 正確かどうか (Accuracy)
- d. ぺらぺらかどうかと発音 (Fluency and pronunciation)
- f. 覚えているかどうか (Memorization)

【タスク Task】

あなたの国と日本を比べてください。自分の国と比べて、日本だけのもの／ことがあると思います。あなたがおもしろいと思ったことを選んで、発表してください。

or

あなたの国ではできない、日本でしかできないおもしろい／ユニークな経験について発表してください。

【内容 Content】

- ① そのトピックを選んだ理由 (reason)
- ② おもしろい経験／日本だけのもの・こと
- ③ おもしろいと思ったポイント、意見 (opinion)、提案 (suggestion)
- ④ クラスのみんなに質問したいことを一つ聞いてください。

【その他 Other Information】

- a. 写真を 10 まいつかって、パワーポイントを作ってください。1 まいのスライドに 1 まいの写真をはってください。
- b. メモを見てもいいですが、覚えたほうがいいです。
- c. 音楽や動画 (movie file) は使わないでください。
- d. スライドに字を書きすぎないで下さい。
- e. SPJ4 で勉強した単語や文型 (sentence patterns) をたくさん使ってください。クラスメートが知らないかもしれない単語は英語訳 (English translation) をパワーポイントのスライドに書いてください。

このプレゼンテーションでも、やはりスピーチマナーなどに関しては、原稿を読まずに聞き手を意識し話すように練習することなど、ミニ・スピーチ指導時と同様の注意を促した。ここで重要な留意点は、まず、前回のミニ・スピーチにおいては、意味のまとまりを意識させ自分が伝えたい情報を列挙し伝えることに主眼においたが、パワーポイントによる発表では、更に発展させ、より複雑で高次の談話を形成するための学習活動になるように工夫し、指導を行うようにした。この活動では、単に面白いと思ったことを伝えるだけではなく、日本と学習者の国を比較／対比し分析した上で、簡単なもので構わないので、違いに対する自分の発見や意見、提案などを必ず行うように伝えた。こうしたプレゼンテーションの発表原稿、あるいは

発表用スライドの作成過程で、学習者は、教師の指導を離れたところで、自分の発話の前後間のつながりを認識し逆接や順接など接続詞や副詞などを使用する、教師以外の日本語母語話者と協働する（例えば、日本人の友人、ホームステイの家族に違いについて質問する）等の、教室外での自主的な学習活動を必然的に行うことになる。

また、これに加えて、発表者への聞き手側からの質問の前に、発表者から必ず一つ聞き手であるクラスメートに質問をするように設定し、実際の発表の場でのアウトプット活動、インプット活動、話し手と聞き手の学習者同士のインターアクションの時間を増やし、学習者相互の自発的な発話を促すように工夫してみた。

また、発表内容が高度になると、やはり未習単語が多くなるので、学習者にはミニ・スピーチの時より更に入念に単語リストを準備するなどしてクラスメートが理解できる発表になるように留意させた。プレゼンテーションにおいても聞き手に、レポーターとして日本の物、出来事（体験）、社会現象などについて自国と比較しながら説明、報告させる情報提供型のプレゼンテーションになるようにある程度内容の一貫性を持たせた。また、後半部分には自分の意見や考えを述べる意見表明型の箇所を設けるようにした。プレゼンテーションのフォーマットは下記の通りである。

プレゼンテーションのフォーマット (Format) :

1. はーい、みなさん、こんにちは／おはようございます！

レポーターの [your name] と申します。

_____から参りました。よろしくおねがいます！

今日は、これから [your topic] について (about) 、レポートします。

2. 私がこのトピックを選んだ理由 (reason) は、[reason] からです。

or

[reason] ので、私はこのトピックについて話そうと思ったんです。

3. では、はじめましょう！

まず／はじめに／最初に1枚目のスライド (the first slide) をご覧ください。

次に、2枚目のスライドを 見てください/見てみましょう。

では、3枚目のスライドに移りましょう/行きましょう。

4. Report a few outcomes or findings from your presentation.

このレポートから、 _____ ということがわかりました。

それから、 _____ と思いました。

5. Ask the question that you want to ask your classmates.

6. Questions from your classmates:

では、何か、質問があったら、どうぞ。質問がなければ、これで、私の発表を終わります。今日は、私の発表を聞いてくださって、ありがとうございました。

4.2 パワーポイントによるプレゼンテーションの実践例

下記は、2014 年秋学期のあるクラスのプログラムの例である。

Section B: 11:00 ~	Section A: 12 : 00 ~
1. マリーさん 「日本の女性/男性のファッション」 2. ジョセフさん 「日本の心理学」 3. クリスタルさん 「動物カフェとコスプレ系飲食店」	1. サラさん 「妖怪」 2. アレナさん 「ペットボトル」 3. ソフィアさん 「アメリカのコミック VS 日本のコミック」

ミニ・スピーチの時と同様に留学生の様々な視点から見た日本の姿を垣間見ることができ、興味深い。このプログラムを見ると、ミニ・スピーチ作成時にはなかった日本で発見したこと／体験したことと自国の状況とを比較するというタスクが加わっているため、初中級レベルと言っても上記のような知的な様々な話題が取り上げられていた。しかし、事前にガイダンスとトピック選定のための動機づけのディスカッションを入念に行うことで、初中級レベルであっても、より知的で高度な話題を自由に選ぶことが可能になり、相乗的により一層発表のいい動機づけにもなり、クラスメートである聞き手に伝える喜びを感じつつ楽しみながらプレゼンテーションを行う様子が覗えた。

評価方法や学生同士のコメント／評価のやりとり（ピア・フィードバック）、学生同士の評価による最優秀プレゼンターの選出と表彰などについては、ミニ・スピーチとほぼ同様に行った。

5. 終わりに：反省材料と今後の展望

今回のミニ・スピーチとパワーポイントによるプレゼンテーションで取り上げられた話題は、個々の学生が日本について興味、関心を抱き本当に話したい、伝えたいと思っているもので、教師の想像を超えるものが多く見られた。これらのトピックについては、やはり教師主導の日々の文型定着のための会話練習ではなかなか扱えない話題であることは認めざるを得ないと感じた。また、自分が本当に話したい話題であれば、学生は自発的に学習活動を起こし懸命に伝えるための努力を惜しまないこと、教師が思っている以上に未習の文法事項や単語を駆使し、使いこなすことができることにもしばしば驚かされた。これらのことは、一日本語教師として今後の教材開発への一つの警鐘となる問題であり、これからの会話練習教材作成の在り方への一つの反省材料になるのではないかと感じている。しかし、であるからこそ、15 週間のコース内で、ミニ・スピーチからパワーポイントによるプレゼンテーションという形で段階的に、少しでも学習者が本当に興味を持っている話題、本当に話したいと思っている話題について、他者と関わりながら自ら調べ発表原稿とスライドを作成し、他者の存在を意識しつつ人前でまとまった形で伝えるという学習活動をコースに組み込むことには意義があるのではないだろうか。

一つのコース中に中間試験前の学習項目の総括としてのミニ・スピーチを行い、更に段階的に期末試験前にそれまでの既習事項の総括としてのパワーポイントによるプレゼンテーションを行うという 2013 年からの試みについての学生からの評価は現在調査、分析中であるので、アンケート結果を基にした反省材料については、また別の機会で発表していくつもりである。しかし、発表後、楽しかったと伝えてくれた学生や自分の発表の動画を CD にコピーし記念に持ち帰りたいという学生も多数見られたことなどから、高く評価してくれていることを期待している。先行のシンガポールの初等中等教育での実施例からの教師の感想として、「学習者の興味のあるトピックについての発表なので、一人一人の個性が出ていて、聞く側にとっても非常におもしろい経験である。特に発表者の意外な一面が覗えた時の驚き、また自分と同じ趣味を持つ人を発見する喜びがこの Show&Tell の予想外の収穫だとも言えよう」(タン 2010:4) という報告があったが、筆者の今回の試みでも全く同様の感想を得た。

今後、スピーチやプレゼンテーションという形式に拘らず、日本語をコミュニケーションの道具とした様々な形式で、学習者が本当に表現したいことを自発的に学習して行ける場を拡大していきたいと考えている。この試みから、教師はそのような学習者オートノミーを促すための「引き出し役」(ファシリテーター／促進者)として、自発的な学習の場をうまくお膳立てさえしていけば、学習者は教師が思っている以上に自らの力で学習成果をあげられるのではないかと感じている。

その他、学習者が本当に話したいと思っている話題の提示方法については、プロジェクトの発表形式をスピーチやプレゼンテーションに限定せず、スキット(寸劇)、動画作成、ビデオレター、ニュース番組、トークショー、企業のプレゼン、商品のプロモーション、コマーシャルのパロディ、(タン 2010:6)などの形式で、発表形態そのものも学習者が自由に選び、既習学習項目を総括的に発表する場とすることはできないかと考えている。

以上のような学習活動を実行するには、やはり時間が必要であり、コース内での進度調整をうまく考え行っていく必要があるだろう。「最も大きな課題はこれらの活動のために、いかに限られた授業の時間を有効に、効率的に利用するかということである」(タン 2010:7) という指摘もある。

また、これらの活動を行う際、特に初級の学習者にとっては、難しい語彙や未習の文法を扱うことが不可欠になってくる。しかし、今回の試みで、教師がこれはまだ未習だからと導入／提示させることをためらうより、学習者が本当に「話したいことが話せたという満足感」(国際交流基金関西国際センター2014)を得させることの方が大切であり、またそのような学習プロセスにおいては、未習／既習という教師の心配は逆に足枷になるのではないかと感じている。問題点としては、今回のプロジェクトでも、学習者には自由に未習単語のリストを作成させるようにしたが、聞き手の学生によっては伝わりにくい発表もあったので、単語リストをある程度統一するなどフォーマット化してもいいのではないかと感じた。

最後に、昨今、ADHDの学生など人前で話すことについて問題を抱えている学生も少なからず存在していることを挙げておきたい。その際には一人一人の学生の事情に個別に寄り添い、その都度最適な対応策を講じることしか道はないように思われる。

参考文献

- 稲葉みどり (2011) 「アウトプット重視の日本語授業の構想創り—自己紹介のプレゼンテーション作成と発表—」 愛知教育大学学術情報リポジトリ、
<http://hdl.handle.net/10424/4120>
- 岡崎敏雄 (1989) 『日本語教育の教材』 アルク
- 岡崎敏雄・岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』
凡人社
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉 編著 (2003) 『日本語教師のための知識本シリーズ③
人間主義の日本語教育』 凡人社
- 黒崎典子 編 (2012) 『中級日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』 凡人社
- 鴻野豊子 (2013) 『日本語教師の7つ道具シリーズ7 会話授業の作り方編』
国際交流基金 (2007) 『国際交流基金日本語教授法シリーズ6 話すことを教える』
ひつじ書房
- 国際交流基金関西国際センター (2014 第5版) 『初級からの日本語スピーチ 国・
文化・社会についてまとまった話をするために』 凡人社
- 高屋敷真人 (2011) 「学習者主体のディスカッションによる上級読解授業の実践—
学習者が読み物教材を選べる上級読み書き授業—」 『関西外国語大学留学生別科
日本語教育論集』 21号 pp.15-35.
- タン・チンイエン (2010) 「コミュニケーションツールとしての日本語—発表形式
の可能性—」 国際交流基金日本語教育通信海外日本語教育レポート第22回、
<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/report/022.html>
- トムソン木下千尋 編 (2009) 『学習者主体の日本語教育 オーストラリアの実践研
究』 ココ出版
- ネウストプニー・J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- ネウストプニー・J.V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』 岩波書店
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子 (2011) 「日本語教科書における口頭発表指導につ
いて—日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究—」 『金
沢大学留学生センター紀要』 14号 pp.29-41.
- 三浦香苗他 (2006) 『アカデミックプレゼンテーション入門』 ひつじ書房
- 宮崎里司、ヘレン・マリオット編 『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのイン
パクト』 明治書院
- 山田陽子 (2012) 「スライド作成と口頭表現技術を学ぶ日本語教育—留学生の『日

本語プレゼンテーション授業』から—『名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究』第17号 pp.169-180.

Nunan, D. and Richards, J C. ed. (2015). *Language Learning Beyond the Classroom*. New York and Rondon:Routledge.

(mtakayas@kansaigaidai.ac.jp)